

### §3. 球面調和関数と回転群の表現, Gelfand 対

$\Delta$  と直交群の作用は可換であるから,  $T(g)\mathcal{H}_k \subset \mathcal{H}_k$  ( $\forall g \in SO(n)$ ).

変数を  $S$  に制限して,  $T(g)\mathcal{B}_k \subset \mathcal{B}_k$  ( $\forall g \in SO(n)$ ).

ゆえに,  $\mathcal{B}_k$  に  $SO(n)$  の表現  $(T_k, \mathcal{B}_k)$  を得る:  $T_k(g) := T(g)|_{\mathcal{B}_k}$ .

すなわち,  $g \mapsto T_k(g) \in GL(\mathcal{B}_k)$  は群準同型.

$\mathcal{B}_k \subset L^2(S)$  であり,  $S$  の標準測度は  $SO(n)$  不変であるから,  $(T_k, \mathcal{B}_k)$  は**ユニタリ表現**. すなわち, 各表現作用素はユニタリ作用素<sup>1</sup>である.

$$\|T(g)Y\|_2^2 = \int_S |Y(g^{-1}\mathbf{u})|^2 d\sigma(\mathbf{u}) = \int_S |Y(\mathbf{u})|^2 d\sigma(\mathbf{u}) = \|Y\|_2^2.$$

**定理 3.1.**  $SO(n)$  のユニタリ表現  $(T_k, \mathcal{B}_k)$  はすべて既約で, 互いに同値ではない.

**定義 3.2.** (1) 表現が**既約**  $\stackrel{\text{def}}{\iff}$  不変な閉部分空間は  $\{0\}$  か全体のみ<sup>2</sup>.

(2) 群  $G$  の二つの表現  $(T_1, V_1), (T_2, V_2)$  が**同値**

$\stackrel{\text{def}}{\iff}$  線型同型  $A: V_1 \rightarrow V_2$  が存在して,  $AT_1(g) = T_2(g)A$  ( $\forall g \in G$ ).

定理 3.1 の非同値性の部分は, 今の場合は  $k \mapsto \dim \mathcal{B}_k = \dim \mathcal{H}_k$  が狭義単調増加であることから従う.

•  $L: SO(n)$  における  $e_n$  の固定部分群.  $L \cong SO(n-1)$  であった.

$\dim \mathcal{B}_k^L = 1 > 0$  であったことを思い出す.

**定理 3.3.**  $SO(n)$  の既約ユニタリ表現  $(T, V)$  で  $L$  不変ベクトル, すなわち  $v \neq 0$  s.t.  $T(l)v = v$  ( $\forall l \in L$ ) を持つものは, ある  $k$  に対する  $(T_k, \mathcal{B}_k)$  と同値である.

したがって,  $L^2(S) = \bigoplus_{k=0}^{\infty} \mathcal{B}_k$  は  $SO(n)$  の表現としては, **無重複**な既約分解である.

$\rightsquigarrow (SO(n), L)$  は **Gelfand 対**である.

$G$ : 局所コンパクト群<sup>3</sup> (Hausdorff はつねに仮定),  $K: G$  の部分群.

**Gelfand 対  $(G, K)$  の定義をしようと思う:**

$G$  には**左 Haar 測度**  $\mu$  が, 正の定数倍を除いて一意的に存在する.

— 正則な Borel 測度 ( $\neq$  零測度) で左不変, コンパクト集合の測度は有限.

<sup>1</sup>全射等長作用素. 有限次元空間の場合は, 等長であることから全射が出るが, 無限次元だとそうではない. ただし, 群準同型であることが先にわかると,  $T(g^{-1})$  が  $T(g)^{-1}$  になるから, 全射であることがわかる.

<sup>2</sup>無限次元表現の場合も含めた定義. 正確には, **位相的既約**という. ここでは, 有限次元表現なので, すべての部分空間は閉集合であることに注意.

<sup>3</sup>コンパクト近傍が基本近傍系をなす.

— **Borel  $\sigma$ -algebra**  $\stackrel{\text{def}}{\iff}$  開集合全体で生成される  $\sigma$ -algebra.

— **Borel 測度**  $\stackrel{\text{def}}{\iff}$  Borel  $\sigma$ -algebra を定義域にする測度.

— Borel 測度が**正則**  $\stackrel{\text{def}}{\iff}$  外正則かつ内正則

(あ)  $\mu$  が**外正則**  $\stackrel{\text{def}}{\iff}$  任意の Borel 集合  $E$  に対して  $\mu(E) = \inf_{\substack{U \supset E \\ U \text{ は開集合}}} \mu(U)$ .

(い)  $\mu$  が**内正則**  $\stackrel{\text{def}}{\iff}$  任意の Borel 集合  $E$  に対して  $\mu(E) = \sup_{\substack{K \subset E \\ K \text{ はコンパクト}}} \mu(K)$ .

— **左不変**  $\stackrel{\text{def}}{\iff}$  任意の Borel 集合  $E$  と任意の  $g \in G$  に対して,  $\mu(gE) = \mu(E)$ .

**注意 3.4.** 全空間が  $\sigma$  コンパクトでないときは上の内正則性の要求は強過ぎる.

$L^1(G)$ : 左 Haar 測度  $\mu$  に関する  $L^1$  空間.

$L^1(G)$  には**たたみ込み**がある (左移動の積分):

$$f_1 * f_2(x) := \int_G f_1(y) f_2(y^{-1}x) dy = \int_G f_1(y) (L_y f_2)(x) dy.$$

$\mathbb{R}^n$  上の Lebesgue 測度のときと同様に,  $f_1, f_2 \in L^1(G) \implies f_1 * f_2 \in L^1(G)$ .

かくして,  $L^1(G)$  に結合的で双線型な積が導入された.

**定義 3.5.**  $L^1(G//K) := \{f \in L^1(G); L_k f = R_k f = f \ (\forall k \in K)\}$ .

$L^1(G//K)$  に属する函数を**両側  $K$  不変**な可積分函数という.

同様に, 台がコンパクトな  $G$  上の連続函数の空間を  $C_c(G)$  で表し, その中で両側  $K$  不変な函数がなす部分空間を  $C_c(G//K)$  で表す.

• 一般に, 連続準同型  $\Delta_G : G \rightarrow \mathbb{R}_{>0}$  が存在して,

$$\mu(Eg) = \Delta_G(g) \mu(E) \quad (\forall g \in G, \forall E : \text{Borel 集合}).$$

•  $\mathbb{R}_{>0}$  のコンパクト部分群は  $\{1\}$  のみ. ゆえに,  $\Delta_G|_K$  は  $K$  上恒等的に 1.

•  $L^1(G//K)$  は  $L^1(G)$  の閉部分空間であって, たたみ込みで閉じている.

**定義 3.6.**  $(G, K)$ : **Gelfand 対**  $\stackrel{\text{def}}{\iff}$   $L^1(G//K)$  におけるたたみ込みが可換.

**定理 3.7** (Gelfand).  $G$  の連続自己同型  $\theta$  で,  $\theta^2 = 1$  をみたし, かつ

$$\theta(x) \in Kx^{-1}K \quad (\forall x \in G)$$

をみたすものが存在すれば,  $(G, K)$  は Gelfand 対である.

証明を始める前に:

•  $(G, K)$  が Gelfand 対ならば  $G$  は**ユニモジュラー**である. すなわち,  $\Delta_G$  は恒等的に 1 である. したがって, 次式が成り立つ.

$$\int_G f(x^{-1}) dx = \int_G f(x) dx.$$

•  $f^\vee(x) := f(x^{-1})$  ( $x \in G$ ) とおく.

**問 1** 一般に,  $f, g \in C_c(G)$  のとき,  $(f^\vee * g^\vee) = (g * f)^\vee$ .

**定理 3.7 の証明** 各  $f \in C_c(G)$  に対して,  $f^\theta(x) := f(\theta(x))$  ( $x \in G$ ) とおく.  $\theta$  は自己同型ゆえ,  $C_c(G) \ni f \mapsto \int_G f^\theta(x) dx$  は左不変, すなわち,  $f$  を  $L_a f$  ( $a \in G$ ) に置き換えても不変である. 左 Haar 測度の一意性より, 定数  $c > 0$  が存在して,

$$\int_G f^\theta(x) dx = c \int_G f(x) dx \quad (\forall f \in C_c(G))$$

が成り立つ.  $f$  の所に  $f^\theta$  を代入することにより,  $c = 1$  がわかる. よって, たたみ込みの定義式より,  $g$  も  $C_c(G)$  に属するとき,

$$f^\theta * g^\theta(x) = \int_G f(\theta(y)) g(\theta(y)^{-1}\theta(x)) dy = (f * g)^\theta(x).$$

さて,  $f \in C_c(G//K)$  のとき, 仮定より  $f^\theta = f^\vee$  となる. これと問 1 より,

$$(f * g)^\theta = (f * g)^\vee = g^\vee * f^\vee = g^\theta * f^\theta = (g * f)^\theta.$$

これより  $f * g = g * f$  を得るから,  $(G, K)$  は Gelfand 対である. □

**補題 3.8.** 任意の  $g \in SO(n)$  に対して,  $\exists l_1, l_2 \in L$  s.t.  $g = l_1 g^{-1} l_2$ .

**証明.**  ${}^t g = g^{-1}$  であるから,  $g e_n \cdot e_n = e_n \cdot g^{-1} e_n = g^{-1} e_n \cdot e_n$  を得る. しかも  $\|g e_n\| = \|g^{-1} e_n\| = 1$  ゆえ, ともに  $e_n$  を極とする等緯度集合に属する. よって,  $\exists l_1 \in L$  s.t.  $g e_n = l_1 (g^{-1} e_n)$ . ゆえに  $l_2 := g l_1^{-1} g \in L$  となり,  $l_1 g^{-1} l_2 = g$ . □

補題 3.8 は,  $\theta$  を恒等写像として, 定理 3.7 が対  $(SO(n), L)$  に対して成り立っていることを示している. ゆえに,  $(SO(n), L)$  は Gelfand 対である.

一般の Gelfand 対  $(G, K)$  に戻ろう.

$L^1(G//K)$  はたたみ込みを積として, 可換な代数である.

$C_b(G//K)$ :  $G$  上の有界連続関数で, 両側  $K$  不変なものがなすベクトル空間.

**定理 3.9.** 連続準同型  $\chi: L^1(G//K) \rightarrow \mathbb{C}$  を考え,  $\chi \neq 0$  とする. このとき, 関数  $\omega \in C_b(G//K)$  が一意的に存在して, 次式が成り立つ.

$$\chi(f) = \int_G f(x) \omega(x) dx \quad (\forall f \in L^1(G//K)).$$

以下、各  $\omega \in C_b(G//K)$  に対して、

$$\chi_\omega(f) := \int_G f(x)\omega(x) dx \quad (f \in L^1(G//K)).$$

**定義 3.10.**  $\omega \in C_b(G//K)$  が Gelfand 対  $(G, K)$  の **帯球函数**

$\stackrel{\text{def}}{\iff} \chi_\omega$  が非自明な連続準同型  $L^1(G//K) \rightarrow \mathbb{C}$  を与える.

次の定理では、コンパクト部分群  $K$  の Haar 測度<sup>4</sup>を  $\int_K dk = 1$  と正規化しておく.

**定理 3.11.**  $\omega \in C_b(G//K)$ ,  $\omega \neq 0$  に対して<sup>5</sup>, 次の (1)~(3) は同値である.

(1)  $\omega$  は帯球函数である.

(2)  $\omega$  は次の **積公式** をみたす:  $\int_K \omega(xky) dk = \omega(x)\omega(y) \quad (x, y \in G)$ .

(3)  $\omega(e) = 1$  であって、各  $f \in C_c(G//K)$  に対して  $\lambda_\omega(f) \in \mathbb{C}$  が存在して、次式が成り立つ.

$$f * \omega = \lambda_\omega(f)\omega.$$

**証明.** (1)  $\implies$  (2) 各  $\omega \in C_b(G//K)$  に対して、 $\Phi_\omega : C_c(G) \rightarrow \mathbb{C}$  を

$$\Phi_\omega(f) := \int_G f(x)\omega(x) dx \quad (f \in C_c(G))$$

によって定義する.  $\Phi_\omega$  を  $C_c(G//K)$  に制限したものが  $\chi_\omega$  である. このとき、任意の  $f, g \in C_c(G)$  に対して、Fubini の定理より、

$$\Phi_\omega(f * g) = \int_G \int_G f(y)g(y^{-1}x)\omega(x) dydx = \int_G \int_G f(y)g(x)\omega(yx) dx dy$$

が成り立つ. ここで、各  $f \in C_c(G)$  に対して、

$$f^\sharp(x) := \int_K \int_K f(k_1 x k_2) dk_1 dk_2 \quad (x \in G)$$

とおくと、 $f^\sharp \in C(G//K)$  であるから、(1) を仮定していることより、

$$\begin{aligned} 0 &= \chi_\omega(f^\sharp * g^\sharp) - \chi_\omega(f^\sharp)\chi_\omega(g^\sharp) = \Phi_\omega(f^\sharp * g^\sharp) - \Phi_\omega(f^\sharp)\Phi_\omega(g^\sharp) \\ &= \int_G \int_G \{\omega(xy) - \omega(x)\omega(y)\} f^\sharp(x)g^\sharp(y) dx dy. \end{aligned}$$

この右辺において  $f^\sharp, g^\sharp$  の定義式を代入し、次いで  $x$  についての積分、 $y$  についての積分のそれぞれにおいて変数変換を行うと、 $\omega$  が両側  $K$  不変であることから、次式を得る.

<sup>4</sup> $\Delta_K(K)$  が  $\mathbb{R}_{>0}$  のコンパクト部分群であり、それは  $\{1\}$  に等しいから、コンパクト群はユニモジュラーであることに注意.

<sup>5</sup>拙著定理 9.6.15 では  $\omega \neq 0$  が落ちている.

$$\int_G \int_G \left[ \int_K \omega(xky) dk - \omega(x)\omega(y) \right] f(x)g(y) dx dy = 0.$$

これより, (1) が結論される<sup>6</sup>.

(2)  $\implies$  (3)  $f \in C_c(G//K)$  とすると, (2) の積公式により,

$$\begin{aligned} f * \omega(x) &= \int_G f(y)\omega(y^{-1}x) dy = \int_K \int_G f(k^{-1}y)\omega(y^{-1}kx) dy dk \\ &= \int_G f(y) \left[ \int_K \omega(y^{-1}kx) dk \right] dy = \omega(x) \int_G f(y)\omega(y^{-1}) dy. \end{aligned}$$

したがって,  $\lambda_\omega(f) := \int_G f(y)\omega(y^{-1}) dy$  として, (3) を得る. さらに, (2) の積公式において  $x = y = e$  とおくと  $\omega(e) = \omega(e)^2$  を得るので,  $\omega(e) = 0, 1$  である.  $\omega(e) = 0$  ならば, 積公式より  $\omega(x) = 0 (\forall x \in G)$  となるので,  $\omega(e) = 1$  である.

(3)  $\implies$  (1)  $\omega(e) = 1$  であり,  $G$  はユニモジュラーであるから,  $\forall f \in C_c(G//K)$  に対して先に現れた  $f^\vee$  を用いると,

$$\lambda_\omega(f) = f * \omega(e) = \int_G f(y)\omega(y^{-1}) dy = \int_G f^\vee(x)\omega(x) dx.$$

ゆえに,  $\lambda_\omega(f^\vee) = \chi_\omega(f)$ . ここで  $f, g \in C_c(G//K)$  のとき, 仮定した (3) より,

$$\lambda_\omega(f * g)\omega = f * (g * \omega) = \lambda_\omega(g)f * \omega = \lambda_\omega(f)\lambda_\omega(g)\omega.$$

これより,  $\lambda_\omega(f * g) = \lambda_\omega(f)\lambda_\omega(g)$  を得る. ゆえに, 問1 より,

$$\chi_\omega(f * g) = \lambda_\omega((f * g)^\vee) = \lambda_\omega(g^\vee * f^\vee) = \lambda_\omega(g^\vee)\lambda_\omega(f^\vee) = \chi_\omega(f)\chi_\omega(g). \quad \square$$

Gelfand 対  $(SO(n), L)$  の帯球函数を求めよう.  $P_k^\lambda(t)$  を  $k$  次の超球多項式とし, 各  $k = 0, 1, 2, \dots$  に対して,

$$\varphi_k(x) := P_k^{(n-2)/2}(xe_n \cdot e_n) \quad (x \in SO(n))$$

とおく. 明らかに  $\varphi_k \in C(SO(n)//L)$ , かつ  $\varphi_k(I) = 1$  である.

**定理 3.12.** Gelfand 対  $(SO(n), L)$  の帯球函数は  $\varphi_k (k = 0, 1, 2, \dots)$  ですべて.

**証明.** まず,  $\varphi_k$  が帯球函数であることを示そう.  $f \in C(SO(n)//L)$  とする. このとき,  $f * \varphi_k \in C(SO(n)//L)$  である. さらに,  $S \approx SO(n)/L$  上の連続函数  $f_0$  を  $f_0(xe_n) := f(x) (x \in SO(n))$  によって定義すると,  $f_0$  は  $L$  不変である. さらに  $x \in SO(n)$  のとき,

<sup>6</sup>拙著 p.164 の①から下2行は字句の修正が必要である.

$$\begin{aligned} f * \varphi_k(x) &= \int_{SO(n)} f(y) P_k^{(n-2)/2}(y^{-1}x\mathbf{e}_n \cdot \mathbf{e}_n) dy \\ &= \frac{1}{\sigma(S)} \int_S f_0(\mathbf{v}) P_k^{(n-2)/2}(x\mathbf{e}_n \cdot \mathbf{v}) d\sigma(\mathbf{v}). \end{aligned}$$

したがって,  $\psi_0(x\mathbf{e}_n) := f * \varphi_k(x)$  ( $x \in SO(n)$ ) によって  $S$  上の連続関数  $\psi_0$  を定義すると,  $L$  不変である.  $\mathbf{u} \in S^{n-1}$  のとき,

$$\psi_0(\mathbf{u}) = \frac{1}{\sigma(S)} \int_S f_0(\mathbf{v}) P_k^{(n-2)/2}(\mathbf{u} \cdot \mathbf{v}) d\sigma(\mathbf{v}).$$

ここで, 直交射影  $L^2(S) \rightarrow \mathcal{Y}_k$  が

$$\frac{d_k}{\sigma(S)} \int F(\mathbf{v}) P_k^{(n-2)/2}(\mathbf{u} \cdot \mathbf{v}) d\sigma(\mathbf{v}) \quad (F \in L^2(S))$$

で表されることに注意する<sup>7</sup>と,  $\psi_0 \in \mathcal{Y}_k$  であることがわかり, したがって,  $\psi_0 \in \mathcal{Y}_k^L$  となる. ゆえに,  $\psi_0(\mathbf{u})$  は  $P_k^{(n-2)/2}(\mathbf{u} \cdot \mathbf{e}_n)$  の定数倍. すなわち,  $f * \varphi_k = \chi_k(f) \varphi_k$  ( $\chi_k(f) \in \mathbb{C}$ ) である. しかも  $\varphi_k(I) = 1$  ゆえ, 定理 3.11 より,  $\varphi_k$  は帯球関数である. 逆に,  $\omega \in C(SO(n)//L)$  を帯球関数とする. このとき  $\omega(I) = 1$  であり, 任意の  $f \in C(SO(n)//L)$  に対して

$$f * \omega = \lambda_\omega(f) \omega \quad \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

が成り立つ. ここで,  $\lambda_\omega$  はたたみ込み代数  $L^1(SO(n)//L)$  から  $\mathbb{C}$  への非自明な連続準同型である. さて, 仮に  $\lambda_\omega(\varphi_k) = 0$  ( $\forall k = 0, 1, 2, \dots$ ) であったとしよう.  $L^2(SO(n)//L) = \bigoplus_{k=0}^{\infty} \mathbb{C} \varphi_k$  であり, Schwarz の不等式から得られる評価

$$\int_{SO(n)} |f(x)| dx \leq \left( \int_{SO(n)} |f(x)|^2 dx \right)^{1/2} \quad (f \in L^2(SO(n)))$$

より  $L^2(SO(n)) \subset L^1(SO(n))$  であり,  $L^2$  ノルムによる収束から  $L^1$  ノルムによる収束が導かれる. したがって, すべての  $f \in L^2(SO(n)//L)$  に対して  $\lambda_\omega(f) = 0$  となる.  $L^2(SO(n)//L)$  は  $L^1(SO(n)//L)$  において稠密であるから  $\lambda_\omega = 0$  を得て,  $\lambda_\omega$  は自明な準同型となってしまう. よって, ある  $k$  に対して  $\lambda_\omega(\varphi_k) \neq 0$  である. 一方, ①より,

$$\lambda_\omega(\varphi_k) \omega = \varphi_k * \omega = \omega * \varphi_k = \lambda_{\varphi_k}(\omega) \varphi_k \in \mathbb{C} \varphi_k.$$

$\lambda_\omega(\varphi_k) \neq 0$  ゆえ  $\omega \in \mathbb{C} \varphi_k$  となり,  $I$  における値を比べて,  $\omega = \varphi_k$  を得る. □

---

<sup>7</sup>部分空間  $\mathcal{Y}_k$  の再生核が  $\frac{d_k}{\sigma(S)} P_k^{(n-2)/2}(\mathbf{u} \cdot \mathbf{v})$  で与えられることによる.